

先進国における社会林業の展開：先行研究レビューから

劉彬洋・永田信・古井戸宏通・竹本太郎（東大院農）

要旨：社会林業とは、持続可能な発展を図った上で、とりわけその中の社会的利益の提供を重視する林業活動であり、コミュニティー林業などの類似した言葉と同じ意味で良く使われている。1980年代、社会林業プロジェクトは、農村における貧困解消と環境保全などのため、途上国の多くで展開されてきた。しかし、近年社会林業は、一部の先進国においても国家プランとして実施されるようになってきた。先進国の社会林業は、途上国のそれとは同じものではなく、森林のポスト生産主義の実践とも言われている。本論文は、社会林業という言葉の解釈から始まり、途上国の社会林業プロジェクトを概観した上で、先進国の社会林業の背景、性格及びその特徴を、英国のコミュニティーフォレスト（community forests）に関する先行研究のレビューから分析する。最後に、社会林業の特徴をまとめた。

キーワード：社会林業，先進国，日本，ポスト生産主義

Abstract: The term social forestry can be understood broadly as a proliferation of social interests influencing the practices of forestry without losing any sustainability. Social forestry is frequently used as an interchangeable term with community forestry. As we know, Social forestry project has been rapidly accepted by many developing countries since 1980s mostly as an effective approach of rural development to deal with the issues such as firewood crisis, rural poverty and degraded environment. However, recent researches and empirical evidences show us that there is a clear tendency in part of the advanced countries that the social forestry has been emerged, which might be called as multi-purpose forestry or post-productivism forestry. Hence, in this paper, first, I will make an explanation of the different usages of the term social forestry and survey briefly the situation of social forestry projects executed in developing countries in 1980s. Then, the experiences of community forests in the UK will be drawn, by which, the background and characteristics of these newly emerged social forestry in advanced countries could be cleared. In conclusion, the characteristics of social forestry in advanced countries will then be discussed.

Keywords: social forestry, advanced countries, Japan, post-productivism

I はじめに

社会林業とは地域住民の福祉の維持、向上を目的とする参加型の林業活動またそのような理念である(6)。だが、我々は社会林業というと恐らく1980年代の社会林業プロジェクトもしくはコミュニティー林業を思い浮かべるであろう。なぜなら、社会林業という言葉はしばしば社会林業プロジェクトから定義され、かつその使い方に混乱が見られるからである。

周知のとおり、1980年代の社会林業プロジェクトは農村の貧困の解消と環境保全などのため、途上国にて展開されてきたが、近年、社会林業は一部の先進国においても実施されるようになってきた。先進国の社会林業はこれまで途上国のそれとは同じものではなく、森林のポスト生産主義の実践とも言われている(12)。ポスト生産主義の下で森林は単純に生産の場として見なされるのでは

なく、レジャー、教育、環境、社会、文化資源などとして社会から構成された、消費される場という見方なのである。こうした先進国の社会林業に関する研究状況は管見の限りではほとんど報告されていないように思う。そのため、本論文は、社会林業という言葉の解釈から始まり、途上国の社会林業プロジェクトの展開に若干触れながら、先進国の社会林業の展開の背景、性格及びその特徴を、英国（以下 UK）のコミュニティーフォレスト（community forests）についての先行研究レビューから分析する。最後に、先進国における社会林業の特徴をまとめた。

II 社会林業の定義

社会林業は、一般的に、1970年代のインドに端を発した言葉と考えられ、その後、新しい林業理念として多く

の途上国に導入された。社会林業には様々な定義があるが、コミュニティー林業と同じ意味でしばしば使われる。例えばFAO (2) は「(コミュニティー林業は) 社会林業とも呼ばれ、永久的に、持続的に地域住民とりわけその中の貧困住民の生計を改善するため、プロジェクトの設定と実行において、参加手法を用い、コミュニティーの自立を目指す林業活動である」と定義した。しかし最近では両者の使われ方が分化してきている (5)。社会林業が個人ベースの活動を含む包括的な活動に対して用いられるのに対して、コミュニティー林業は共同的な活動に対して用いられるのである。さらに、コミュニティー林業に類似する表現としてコミュニティーフォレスト (community forests) やコミュニティーを基盤とした林業 (community-based forestry) を挙げることができよう。これら一連の言葉は、林業の意思決定と実践においてコミュニティーの参加がある時に使用されているが、多くの学者は厳密に区別している (表-1)。

表-1. コミュニティー林業に関する使い分け

Table.1 The different terms of community forestry

コミュニティーフォレスト (community forests)	明白な意思決定と実行の法律権利を持つ関連アクターがローカルコミュニティーの利益のために土地を中心に管理を行う。
コミュニティー林業 (community forestry)	人と森林との相互作用を重視し、地域住民と環境のための林業活動を目指す。
コミュニティーを基盤とした林業 (community-based forestry)	コミュニティーと他の協力実体との相互作用によって森林の持続可能な管理への参加を促す。

出典: (1) などを参考に報告者作成

一方で、コミュニティーという言葉自体も統一した定義が存在せず、適切な運用がなされていないとの指摘もある (1)。このように、社会林業もしくはコミュニティー林業といった言葉の使い方にはかなりの混乱がある。筆者は無用な議論を避けるため、社会林業という言葉自体に注目したい。社会林業は「社会」と「林業」という二つの言葉を組み合わせた言葉である。「社会」という言葉は社会利益、厚生、社会の参加などを意味する。よって、森林の環境的、経済的、社会的機能のバランスを良く取った上で、参加手法を用いてとりわけその中の社会的利益の提供を重視する林業活動を社会林業と考える。本論文では社会林業は、コミュニティー林業といった社会林業的なものの包括的な概念として用いる。

III 80年代の途上国における社会林業プロジェクト

1980年代における途上国の社会林業プロジェクトはそれぞれの目的、状況が異なるが、住民参加、アグロフォレストリーなどの手法を用いて、フィリピン、タイ、インド、ネパールなど、東南アジアや南アジアにおいて地域開発の方法として展開されてきたと言えよう。

では、なぜ80年代から森林と人に対する関心が一層高まってきたのか。この答えは当然ケースバイケースであるが、共通する原因は以下の四点が考えられる。第一に、エネルギー問題 (燃料不足) がある。少なくとも、80年代の途上国では、社会林業プロジェクトが多様なニーズの満足というより、エネルギー問題の解決策として始められたと言える。第二に、環境の悪化がある。燃料の需要の高まり、途上国の森林の商業伐採、戦後植民地から独立した国々の産業的な発展の木材需要、人口の増加などが森林の減少をもたらした。それによって洪水が多発し、山崩れといった災害が度々起きていた。第三に、政権の維持といった政治的な要素も指摘された (14)。途上国の山林の多くは、国家所有或いは集団所有となっているが、住民による慣行的な利用が行われてきたところでもある。経済的利益を獲得するため、その所有権の多くは多国籍企業或いは大地主に売られた。そのプロセスの中で、多くの現地住民が森林から追い出された結果、大きな摩擦を招き、反体制勢力の拡大へと繋がった。社会林業の導入による社会的不安要素の除去は、権力の維持にとって欠かせないものであったと考えられる。第四に、産業主導の理論や発展思想を採用してきた戦後植民地から独立した国々の農村発展の行き詰まりである。多くの人とりわけ森林に最も近い地域住民はこのような成長パターンから外され、ますます貧しくなっている (7)。

IV UKのコミュニティーフォレストから見る先進国の社会林業

先進国の社会林業は途上国の社会林業とやや違い、多様な目的の林業若しくは森林のポスト生産主義の実践とも言われる (12)。Stanley et al (12) は「社会の自然」という概念を森林分野まで広げ、森林の社会化に注目した。彼らは森林が社会で構造され、社会の個人或はグループに消費されるという視点から、森林を地域の社会的、文化的、政治的、経済的なプロセスと構造の中に置いて理解する重要性を強調した。ポスト生産主義とはUKの農村・農業研究から始まった理論であり、明白な定義のもとで、多くの研究者が生産主義のアンチテーゼとして捉えている。生産主義についてLowe et al (9) は生産性を重視する政府の支持の下での集約的、産業的かつ拡張的

な農業生産と定義した。Lowe et al (4) は、生産主義の主要な特徴が農業生産の集約化、集中化、専門化にあることを見出した。彼らは農業生産の減少、国庫補助金の撤退、食糧生産における国際市場での競争が一層高まり、農業に対して益々厳しくなった環境規制をポスト生産主義の特徴とし、生産主義からポスト生産主義への移行を、集約化から粗放化へ、集中化から分散化へ、専門化から多様化へと特徴づけた。また、Wilson (13) は、先行レビューより、生産主義とポスト生産主義を、イデオロギー、食糧体制、農業生産、農業政策、農業技術、環境影響という6つの側面から特徴づけた。さらに、アクターという視点が常に無視されがちと指摘し、アクターという側面を付け加えた。

林業のポスト生産主義に関しては、残念ながら、研究が極めて少ないものの、Mather (10) はUKのコミュニティーフォレストを元に森林の生産主義と比較し森林のポスト生産主義の特徴をまとめている(表-2)。

表-2. 森林の生産主義とポスト生産主義の特徴

Table.2 The characteristics between productivism forestry and post-productivism forestry

	生産主義	ポスト生産主義
経営目標	木材生産, 単一な機能	環境的サービス, 多様な機能的
典型的な構成	一斉林, 針葉樹	多層, 多齡 (特に広葉樹)
典型的な場所	末梢的, 遠距離な高地	近郊化, 低地
価値	指導的	本質的
思想	合理的	感情的
経営スタイル	権威的	意見を聞く
経営方法	機械化	粗放化

出典: Mather (11) から転載

UKのコミュニティーフォレストとは、1990年に始められた事業であり、工場跡地や炭鉱跡地の再生による高質な環境の提供、レジャー、レクリエーション、文化活動機会の提供、生物多様性の向上、教育支援、健康的な生活、社会、経済発展などを通じて、地域の環境、経済、社会の総合的な再生を目指している(8)。その背景は工場跡地や炭鉱跡地の悪化した環境の再生の要求の他に、UKの森林政策のポスト生産主義への移行に注目しなければならない。UKでは第二次世界大戦を経て、森林資源の枯渇問題が出現した。そのため、戦後森林政策の二つの主要な目標は、木材の戦略備蓄と林業財政の改善であった。その背景には、戦後の木材自給率の引き上げ(1943年白書)や、200万haの植林計画(1951年森林法)

があった。1960、1970年代における国内紙・パルプ市場の好況を受けて、単一かつ集約的で短期に大量生産可能な針葉樹の植林が行われた。しかし、1990年代にフィンランドとスウェーデンといった林業先進国のEUへの加入や、1980年代以降、木材価格の国際市場の下落、古紙の利用及び代替材料の使用が、一連の目標を挫折させた(11)。一方、環境・健康機能が強調され、広葉樹地域の針葉樹転換問題などが自然保護団体から非難されると、1985年には広葉樹林助成金計画(BWGS)が採用され、木材生産は最早主要な目標ではなくなった。これは、ポスト生産主義への移行を象徴する重要なマイルストーンとされている(10)。

このように、コミュニティーフォレストは、途上国の社会林業プロジェクトと同じく産業としての林業の代替戦略として行われてきたが、1980年代の社会林業とはいくかの相違点が見える。まず、UKでは、上記のように戦後UKの森林面積は産業促進政策の下で増加し、減少していないことがあげられる。それによる燃材の不足問題と洪水、山崩れなどの問題も考えられない。だが、UKでは工業、鉱業の放棄地が現れ、居住条件が悪化したことから、環境問題は共通点としてあげられる。第二に、UKの近代社会では、工業跡地の産業の喪失からみれば、コミュニティー林業の目的の一つは雇用の創出にあるに違いはないが、途上国のような貧困対策とは別次元なものである。第三に、途上国の社会林業では貧困の解消や、物質的、金銭的な需要を満たすため、大量の換金作物が植栽されるなど、社会林業とは言いがたいプロジェクト例もある(3)。UKのコミュニティー林業は単純に金銭的な目的を出発点とした活動は殆ど見られず、多くは社会と環境の再生によって経済の再生を図っている。経済的な利益の追求はただその目的の一つのみであるが、最も重要な目的ではない。第四に、住民参加はUKのコミュニティーフォレストにせよ、途上国の社会林業にせよ最も重要な要素であるが、コミュニティーフォレストでは、地域住民を含め多くのボランティア、企業も林業活動に参加しており、パートナーシップの構築に特徴がある(8)。行政の役割はそのような関係を連携させることにある。一方、途上国では、行政が指導的な立場で資金の投入、技術の普及などに重要な役割を果たしている。技術と資金支援の以外に実際に農林業作業に参加している団体や個人が殆ど見られない。

V まとめ

以上から、先進国における社会林業の特徴は表-3のようにまとめることができよう。

出典：筆者作成

表一3. 先進国における社会林業の特徴

Table.3 the characteristics of social forestry in advanced countries

主要目標	持続可能な発展, 地域社会福祉の向上、環境サービスの提供
理念	社会環境利益を優先, 生産の場から消費の場への転換
構成	広葉樹, 多層多齡, 天然林転換
生産	多様化, 分散化
技術	粗放化, 小規模化
政策	森林ガバナンス, 補助金の環境整備への傾斜
アクター	コミュニティの中心的な位置, 多様な参加, パートナシップの関係

すなわち, 先進国の社会林業の特徴は, 地域社会福祉の向上や環境サービスの提供を主要目標とし, 生産から消費の場への転換を理念に持ち, 広葉樹や天然林によって構成され, 多様で分散的な生産, 粗放的小規模的な技術, 環境整備に重点を置く政策, コミュニティを中心に置く多様な主体による参加があるものとして位置づけられた。

引用文献

- (1)BULLOCK, R. C. and HANNA, K. S. (2012) Community forestry : Local values , conflict and forest governance. Cambridge University Press, Cambridge, 186pp.
- (2)FAO (1994) Timber harvesting and the problem of deforestation. FAO For. Harv. Bull. : 4(1), pp.1-3
- (3)FORTMANN, L. (1988) Great Planting Disasters : Pitfalls in Technical Assistance in Forestry, in Agriculture and Human Values, Winter-Spring : 5(1-2), pp.49-60
- (4)ILBERY, B. and BOWLER, I. (1998) From agricultural productivism to post-productivism[M], Addison Wesley Longman Ltd, 267pp.
- (5)井上真 (2000) 住民参加による熱帯森林管理の可能性を探る—多面的アプローチ. 林業経済研究 : 46, pp.19-26
- (6)井上真 (2001) 社会林業, 森林・林業百科事典, 丸善株式会社, 東京, 399pp.
- (7)加藤隆 (1999) 社会林業 (1) 新たな林業開発戦略の模索. 熱帯林業 : 46, pp.57-61
- (8)コミュニティフォレスト HP, <http://www.communityfoest.org.uk/aboutenglandsforests.html>, 2013年9月1日取得
- (9)LOWE, P., MURDOCH, J., MARSDEN, T., MUNTON, R. and FLYNN, A. (1993) Regulating the new rural spaces : the uneven development of land. Journal of Rural Studies : 9(3), pp.205-222
- (10)MATHER, A. S. (2001) Forests of consumption : postproductivism, postmaterialism, and the postindustrial forest. Environment and Planning C : 19(2), pp.249-268
- (11)NAIL, S. (2008) Chapter3 : The Productivist Dream and Its Aftermath Forest policies and social change in England. Forest Policies and Social Change in England. Springer, pp.53-67
- (12)STANLEY, K. G., LAWRENCE, K. and MILBOURNE, P. (2006) Social forestry : exploring the social contexts of forests and forestry in rural area. Paul Cloke, Terry Marsden and Patrick Mooney . Handbook of Rural Studies. Cromwell Press, Wiltshire, pp.230-242
- (13)WILSON, G. A. (2001) From productivism to post-productivism... and back again? Exploring the (un) changed natural and mental landscapes of European agriculture . Transactions of the Institute of British Geographers : 26(1), pp.77-102
- (14)依光良三 (2003) 森と環境の世紀 : 住民参加型システムを考える. 日本経済評論社, 東京, pp.63-119